

シンポジウム：三重大大学の人材育成

中川 正

1. はじめに

三重大学は、5学部が1キャンパスに集まっている総合大学であり、平成22年度における1学年の入学定員は1,310名である。三重大学は、学士課程の使命として、「幅広い職業人養成」と社会貢献機能に重点を置いて世界的研究・教育拠点と高度専門職業人養成につなげることを掲げ、「4つの力」（「感じる力」、「考える力」、「コミュニケーション力」、および総合力としての「生きる力」）の育成と、キャリア支援体制の充実を図っている。

三重大学の就職率は、2005年度以降、毎年94～97%台と、国立大学法人のほぼ平均の水準を保っている。2005年度にキャリア支援セ

ンターを設立し、2010年度より、キャリア支援センターが学生生活支援室や学生なんでも相談室と連携して、新体制の学生総合支援センターとして、支援体制を強化している。

インターンシップの参加者は毎年増加を続け、2005年度には85名であったが、2010年度には251名となっている。また、2005年度2科目であったキャリア関連科目は、2008年度には15科目（受講生1,352名）へと増加させることによって、ほぼ1学年の全学生がキャリア教育を受講できる体制構築した。このようなキャリア支援体制整備に伴い、三重大学のキャリア教育や就職支援体制に対する満足度は年々向上してきた（表1）。

表1 三重大学学生のキャリア教育・キャリア支援に対する満足度（5段階評価）

	2005年度	2006年度	2007年度	2008年度
就職に役立つような学習に対する支援	3. 35	3. 51	3. 70	3. 87
就職活動に役立つ情報提供	3. 33	3. 46	3. 66	3. 82
資格や免許を取ることにに対する大学の支援	3. 27	3. 43	3. 64	3. 78
社会に貢献できる力を養う教育の提供	3. 36	3. 47	3. 65	3. 79

2007年度卒業生を受け入れた事業所に対して、「1：身につけていない」から「4：十分身につけている」の4段階で卒業生の評価を求めたアンケート調査では、「事実や他者に対する誠実さ」（平均3.44）、基礎学力（3.42）、「人と協同して仕事をする力」（3.36）に高い評価を得た一方、「自立的に自ら決断する力」（2.95）、「ディスカッションする力」（2.87）などの評価値が相対的に低くなっている。このように、三重大学の卒業生に対する評価は、「誠実で基礎学力をもち協調性があるが、自立性や自己主張能力に欠ける」といえる。

このような学生の持ち味を生かし、他者とのかわりの中で自他ともに成長を目指す協調性をさらに伸ばすとともに、課題となっている自立性・自己決定性や相手の気持ちにも配慮しながら自分の考えを主張する能力を養成するために、三重大学では、第2期中期目標・中期計画期間において、図1のような人材育成プランを立てている。まず、「4つのカスタートアップセミナー」とよばれる初年次全学指定クラスを整備し、その過程で自己省察を習慣化させるとともに、小グループ内における社会性を養成する。次に、共通教育課程で準備されている、キャ

リア・ピアサポーター資格教育プログラムを通して、学生の職業観を養成するとともに、学内における社会性を涵養する。そして、専門教育の社会連携型専門教育を通して、主体的職業選択を促進し、学外における社会性を養成する。

本稿では、このうち、すでに成果が挙がっている共通教育における「4つのカスタートアップセミナー」、およびキャリア・ピアサポート資格教育プログラムを中心に述べたうえで、社会連携型専門教育をも含めた今後の方向性を提示する。

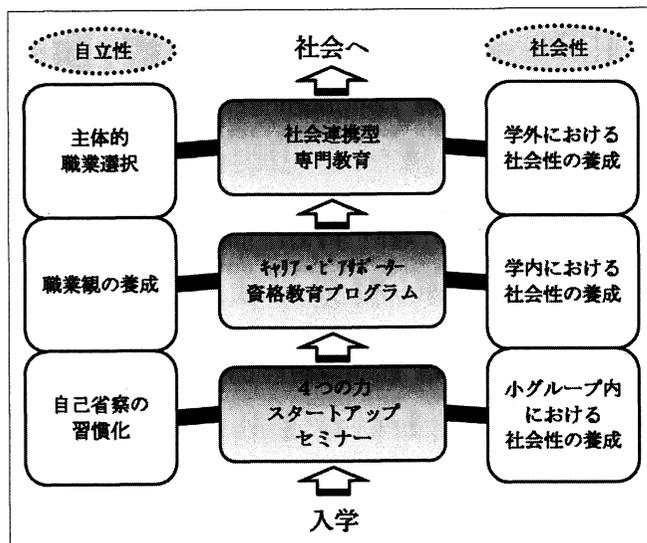


図1. 入学から卒業までの人材育成プログラム

2. 4つのカスタートアップセミナー

(1) 導入の背景

三重大学では、「4つの力」を伸ばすために、PBL（問題発見解決型学習）の全学展開、学生間の授業外での学習コミュニケーションツールである「三重大学Moodle（ムードル）」と呼ばれるコンテンツマネジメントシステムの整備、「4つの力」の経年的変化を測定する修学達成度評価システムの導入などを行ってきた。その結果、2009年度において、全学で429科目のPBL授業を開講し、能動的学習を促進するために導入したコンテンツマネジメントシステム

であるムードルへのアクセスが523万に達した。

一方、学生に「4つの力」とは何かという基本的な認識が生まれていないという問題点も浮かび上がってきた。三重大学の学生として入学したかぎり、本学の教育目標としての「4つの力」とその構成要素を同じようなイメージではらつきのない形で認識することが必要である。大学生として必要な資質を明確に理解したうえで、学生たちは、修学達成度の経年変化を振り返りながら、本学の授業を活用しつつ、自分に必要な能力を主体的に向上させていくことがで

るのである。このような能動的学習姿勢を身につけさせることこそが、三重大学における修学支援を効果的にする前提であると考えた。

三重大学は、この課題を解決するうえで、統一プログラムによる初年次セミナーを共通教育に新設することが効果的であると判断した。既存の初年次プログラムを否定するのではなく、PBLに関する実績を生かしつつ、「4つの力」の共通認識を生みだしながら、能動的に自らの資質を育てる習慣を獲得させるセミナーを新設することによって、全学共通のプログラムと学部主体の多様なセミナーの両者を生かすことができると考えたのである。

本セミナーを導入した2009年度において、医学部、工学部、生物資源学部では必修科目、人文学部と教育学部では選択科目とした。その結果、前期受講者数は1,029名となり、1年次学生数の74%に達した。2010年度には、教育学部においても必修となり、人文学部においても専門科目としての初年次セミナーに同様な主旨の内容を一部組み入れ、ほぼ全学的な体制として整備されるに到った。2010年度には1,171名が受講し、1,158名（98.9%）が4つのカスタートアップセミナーの単位を取得した。

(2) セミナーの内容

本セミナーは、1年次生を40名単位で学部別に編成し、全28クラスで行われた。授業案は、高等教育創造開発センター専任教員と、4学部にわたる10数名の教員によって作成された統一プログラムである。その授業の実施にあたっては、全28クラス中26クラスが、初年次セミナーのために雇用した特任教員が担当することによって、質の統一を図った。さらに、1クラスは授業案作成にかかわった教員によるオムニバス形式とし、その授業後に、毎回、授業案に関する検討を行い、絶えず改善を重ねながら、首尾一貫した授業とする努力が重ねられた。

授業内容設定のポイントは、「4つの力」を理解してもらうこと、ノートテイキング・情報リテラシー・レポート作成・プレゼンテーションなどのアカデミックスキルを獲得すること、グループ活動を通して能動的学習を推進すること、プロジェクト遂行を組み合わせた実践的学習を行うことである。

前期15回の授業は、①大学への学びの招待、②グループ活動、③聞く方法、④意見を述べる方法、⑤テーマ設定の仕方、⑥大学での学び、⑦ものの見方、感じ方、⑧情報の検索、⑨～⑩情報を読み解く、⑪レポートの書き方、⑫発表の方法、⑬～⑭プロジェクトの発表と評価、⑮振り返りと今後への展開、となっている。

授業は、40人のクラスを4名程度の小グループに編成し、そのグループを単位に学習活動をさせた。毎回の授業の基本的要素としては、①ディスカッション、②講義、③グループプロジェクトである。

基本的な授業の流れを説明する。1回目から4回目までは、最初の40分間で流れの説明をして課題の共有をする。全部の授業で、課題を出して自ら考えさせて、グループで共有する。たとえば、コミュニケーションの実践として、最初は目を見て話を聞き、次にそっぽを向いて聞くとどのような印象を持つか、嫌なことを言ったらどう感じるか、などの活動を行う。次に、学生が体験したことをふまえて、教員が効果的

なコミュニケーションとはどのようなものかに関する短い講義を行う。その後に2回目の活動に入る。5回目からは、第2回目の活動が「三重大大学の魅力を紹介せよ」というプロジェクトとなる。三重大大学について理解を深めてほしいという期待も含めて、「三重大大学の魅力」というテーマを設定し、自分の高校に戻って三重大大学の魅力を紹介することを想定したプレゼンテーションづくりを課題とした。

授業の最後には、各グループでリフレクションを行う課題が出される。グループリフレクションのためのシートを記入するにあたっては4人が集まって、今回の授業で自分たちはどんな力がついたかを考えなければいけない。グループ番号と記入者名、集まった場所を書く欄もあり、グループメンバーそれぞれの氏名を書く欄では、「学習時間はどれくらいだったか」、「何を学習してきたか」ということを書かせて毎回提出させている。このように、自己省察を習慣化させて、次の授業に生かすように指導した。

(3) 導入年の成果

「4つのカスタートアップセミナー」を導入した結果、以下のような効果が表れている。

第一に、学生のコミュニケーション力や協調性が向上した。修学達成度評価で、受講前と受講後の比較を行うと、非受講者では個人志向や互惠懸念（グループで活動することに対する抵抗）が向上するのに対して、受講者では両者とも低下している。学生による自由記述によると、「コミュニケーション力がついた」とか、「人と話し合うことに抵抗感がなくなった」という意見が多かった。

第二に、不適応学生の早期発見と対処が可能になった。三人の心理学専攻の特任教員で大多数のクラスを担当するために、一年次生全体の適応状況のある程度網羅的にみることができ、グループワークの過程で発見した不適応学生に対しては、学生なんでも相談室のカウンセラー

や、学部の担当教員との連携などができるようになった。

第三に、「三重大学の魅力」というプロジェクトを行ったために、三重大学に対する愛校心のようなものが芽生えてきたように思われる。

このように、能動的な学習姿勢への転換を目指すセミナーを通して、大学に対する肯定的な評価が生まれ、適応障害に対する早期対策ができ、学生同士で教えたり教えられたりする抵抗感が低下したことは、修学支援を行ったり受けたりする上での前提が満たされようとしていることを示していると思われる。

3. キャリア・ピアサポーター資格教育プログラム

(1) プログラムの内容

キャリア・ピアサポーター資格教育プログラムは、この「4つのカスタートアップセミナー」で身に付けた学習習慣を、キャリア形成に生かすと同時に、修学支援者を育成すべく準備されている。初級資格取得者は、学生支援の業務に参加するための基礎的な素養が認定され、学生の個別学習補助にかかわることができる。また、上級資格取得者は、共通教育や学生総合支援センターにおけるSA（Student Assistant：授業や補習の補助に携わる学士課程学生）に申請する資格を得る。いずれの資格も、履歴書に記載が可能であり、就職活動に生かすことができるものとして、履修を勧めている。

初級資格取得のためには、「4つのカスタートアップ」に加えて、「キャリアプランニング」および、「キャリア実践」科目を取得しなければならない。

「キャリアプランニング」は、「私とは」、「仕事とは」、「社会とは」をキーワードとして、変動する現代に生きることについて、多角的な視点から論じ、自らのアイデンティティの構築と、勤労観・職業観を醸成する科目である。同科目が前期に3コマ、後期に1コマ準備した結果、2010年度においては、330名（1学年定員の約

25%）の受講があった。

キャリア実践科目と称される一連の科目は、大学を社会の縮図とみだてて、大学が実際に行う業務の中で、学生が主体的にできる部分を学生にゆだね、学生に自ら企画運営させることを通して、実践的な生きる力を獲得させるものである。教職員は学生の振り返りを促し、成長を促進するファシリテーターの役割を果たす。初級資格取得を希望する学生は、キャリア実践科目の中から1科目を選択しなければならない。「キャリア・イベント実践」は、キャリア支援センターが行っている就職ガイダンスのうちの1回を担当するものである。「プロから学ぶ将来設計」というテーマで、各界で活躍する人々を招いてキャリアシンポジウムを企画し、実践する。「広報誌編集実践」は、学生総合支援センターが発行する学生情報誌『MIU』の企画・取材・編集・出版を担当するものである。また、「大学紹介実践」は、オープンキャンパスなどで入試広報委員が行う大学紹介を学生の立場から担当するものである。さらに、「学生生活支援実践」は、学生支援のための企画立案と実践を行い、「地域づくり実践」は、大学と地域が連携するまちづくりの実践を行う。これらの企画は、すべて2月に行われる「アカデミックフェア」と呼ばれる学習成果発表会で公開される。

この3つの科目を履修し、初級資格を取得した学生は、上級資格取得のために、「学習支援実践」、「こころのサポート」および選択科目2科目の単位取得が必要である。

「学習支援実践」は「4つのカスタートアップセミナー」のファシリテーション実習である。「4つのカスタートアップセミナー」は30クラス前後開講されるので、そのうちの1つに参加して、教員の補助をするとともに、学習のねらいを理解した上でさらに良い教案を提案するという内容のものである。学生は、教員が指導を行う教案をあらかじめ勉強したうえで、その時間に自らがどのような問題意識で参画するかを毎回ムードルに投稿する。そして、授業の中で

は、小グループを回って、ファシリテーターとして受講生たちの補助を行う。そして、毎週水曜日5コマ目集って、共同で振り返りを行う。さらに、「4つのカスタートアップセミナー」の各クラス代表のプロジェクトの合同発表会を企画運営する。

「こころのサポート」は、学生支援をするうえで最低限必要なこころの問題に関する知識を得るものである。授業を通して、心理的サポートをする上で求められる態度や振る舞いについて理解させ、過不足のない適切なサポートとは何かについて考えさせるとともに、心的問題のある学生を専門的なサポートにつなぐポイントを理解させる。

選択科目には、学生が起業を行う上で必要な、自ら課題を発見・解決する企画立案能力を実践的プロジェクトとともに獲得させる「アントレプレナー論」や、夏休みを利用して実際に企業等で仕事を体験する「キャリア・インターンシップ」などが含まれる。

このようにして、上級資格は最短で2年次期末に取得が可能となる。上級資格取得者は、SAとしての申請資格が得られるために、2年次後期から、授業補助に加わることができる。後期には「キャリア実践」諸科目が開講されるので、たとえば前年度広報誌作成を行った学生が、同じ内容の授業のSAとして雇用されるなど、学生が学生をサポートしながら実践力を身につけることができる(図2)。さらに、3年生になると、「4つのカスタートアップセミナー」や「学習支援実践」のSAとして雇用が可能となり、三重大が教育目標とする、「感じる力」、「考える力」、「コミュニケーション力」および総合力としての「生きる力」を自ら獲得しながら、他の学生にも伝えていくことができる学生の養成を導くプログラムとなっている。

2009年度に始まった同プログラムは、2009

年度末において、13名の初級資格取得者を生み出している。第2期中期目標・中期計画期間が終わる2014年度末までに、累計で260名の初級資格取得者、60名の上級資格取得者を輩出する予定である。

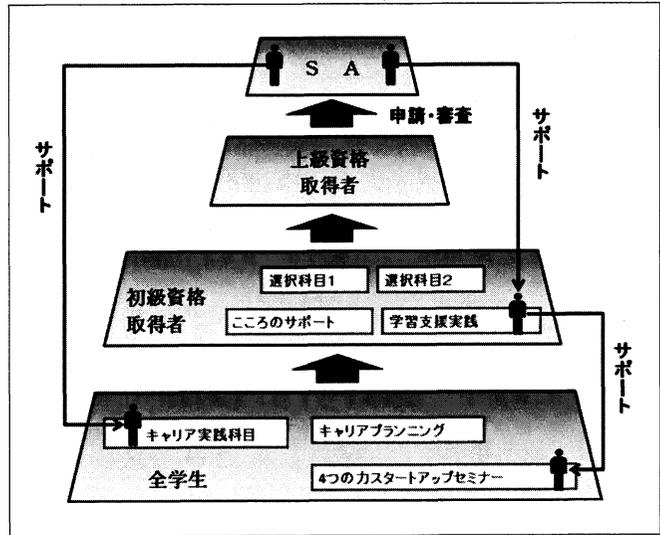


図2. キャリア・ピアサポーター資格教育プログラム

(2) 教職学生協働の実施体制

資格を取得した学生たちは、ピアサポーター学生委員会に所属し、大学における学生支援活動を自ら企画運営するとともに、このプログラムを通して資格を得ようとする学生たちの支援を行う。

このようにして、三重大の人材育成は、教務委員会を中心とした教務体制と、学生総合支援センターを中心とした学生支援体制、さらにピアサポート学生委員会と、それらをすべて下支えする学務部が一体となった教職学生協働体制のもとで展開している(図3)。

共通教育センターは、「4つのカスタートアップセミナー」の実施、キャリア・ピアサポーター資格教育プログラムの実施、インターンシップの実施を行う。学生総合支援センターは、キャリア支援センター長、学生生活支援室長、学生なんでも相談室長と密接な連携を取りながら、キャリア支援・学生支援体制を運営する。それぞれのセンター・室は、学部の委員会と結びつ

いて現場に即したキャリア・学生支援を実施する。キャリア支援センターは、就職ガイダンスを開催し、キャリアカウンセラーを配置して学生のニーズにこたえる。また、卒業生に対しても、就業支援を行う。高等教育創造開発センターは、PBLの教育開発、ムードルやeポートフォリオなど教育情報基盤整備、教育評価部門を通じた学習成果の検証、学生への満足度調査、修学達成度評価、卒業生受け入れ企業へのアンケート分析を行う。そして、学務部は、共通教育や専門教育実施をサポートするとともに、学生総合支援センター運営に参画、キャリア支援の実施、キャリア実践科目の補助、ピアサポーター学生委員会の支援を行う。

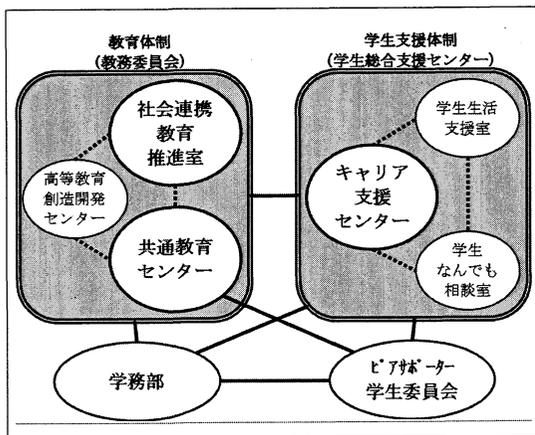


図3. 教職学生協働の実施体制

4. 今後の発展に向けて

三重大学の人材育成体制は、教育目標に基づくディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシーの整備のもとに、さらなる充実が求められている。2010年度には、「大学生の就業力育成支援事業」の選定を受け、専門教育で学ぶ専門的知識を企業や国際的舞台上で生かす実践知形成のために、社会連携教育推進室を設置し、企業、行政、医療現場との連携を教育に生かすプログラムを構築する。専門と結びついた現場で活躍する社会人を非常勤講師として招聘し、専任教員と密接な連携のもとに、実践的な専門科目を開設する。地域の企業に学生を派遣する地域インターンシップを拡充するとともに、海外連携大学に学生を派遣する国際インターンシップを整備する。このようにして、共通教育と専門教育と連携した、実践知養成プログラムとする。

これらの人材育成プログラムは、まだ緒に就いたばかりなので、その評価は今後の成果による。三重大学では、外部委員を加えた委員会を通して評価を行い、その結果を、全学教務委員会、共通教育センター、学生総合支援センターを通して、学部や実施体制に反映していく予定である。

(三重大学・学生支援担当副学長)